「実践事例集Vol.13」（2016年4月発行）で

紹介している事例を中心に抜粋しています。

（公益財団法人 ソニー教育財団）

ソニー幼児教育支援プログラム　幼児教育 保育実践事例サイト
http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/

実践事例集
http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/practice/

２０１５年度　ソニー幼児教育支援プログラム「科学する心」

子どもの育ちを継続した保育からとらえる。

〇気づきのおすそ分け
大阪のソニー幼児教育支援プログラム提出園から綿の苗を分けていただき栽培しました。綿の実がはじけて中から初めての綿花が出てきて観察しているシーンです。

ふわふわや！

花がなくなったら綿が出てくるんや！

そっと触ってみよう

社会福祉法人　ゆずり葉会

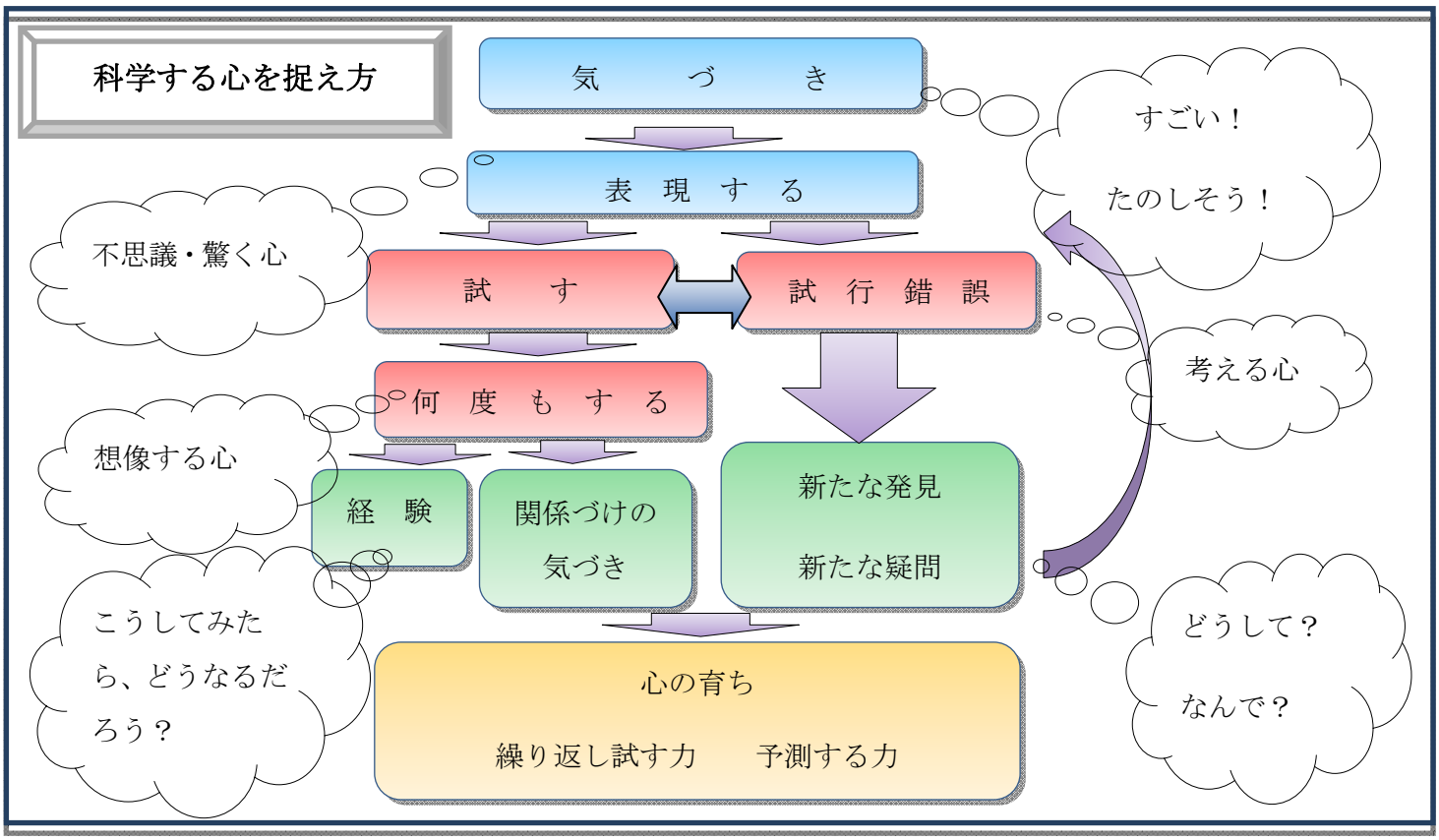
深井保育園

０．はじめに

堺市内にある本園は、すぐ裏手に幹線道路が縦断しており交通量が多く、自然が少ない場所にある。自然を身近に感じながら心身共にのびのびと成長してほしいと願い、園庭に様々な樹木を植えている。モッコバラのアーチ、さらには小川や池も整備するなど豊かな自然環境を心がけている。

１．本園の考える「科学する心」

当園で、“科学する心”を子どもたちの姿からどうのように保育者が捉えているかを、下記の表にまとめた。



２．『子どもの育ちを継続した保育からとらえる』

本園は科学する心の論文に応募を初めて５年目になる。当初は「光と影」や「音」などのテーマを設定して各年齢のそれぞれの気づき、育ちについてまとめて発表してきた。そして昨年度は育ちをストーリーとしてつなぐという視点で各クラスの普段の遊びの中からの気づき、育ちを発表した。

そして今年度は本園の長年の課題としてあがっている、クラスが変わるたびに遊びや育ちに継続性が少ないという点に注目して、今年度は昨年度からの「継続」をテーマに取り組むことにした。継続をテーマに保育していくなかで継続にも２種類の視点があることに気付いた。１つ目は昨年度からの遊びの継続。もう１つは育ちの継続である。

遊びの継続とは、昨年度の論文に発表した内容を今年度再度遊び、昨年度には見られなかった１年間の成長を確認し、そこから遊びのバージョンアップ（深まり）を図ることである。

育ちの継続とは、同じく昨年度の内容を遊び１年間の育ちを確認するが純粋に同じ遊びを継続するのではなく、各年齢なりの育ち、発達に継続性を見出し、新たな遊び（広がり）を展開していく視点である。

今年度は下記表に示したように昨年度の遊びの再現、１年間の成長の確認を行なう所からスタートしている。本園の特徴でもある０歳児から５歳児までの活動を論文に整理していく中で見えてきた、各年齢なりの継続した育ちをまとめていく。

昨年度のクラス	論文内容
りす（0歳児）	すべらせる遊び
ひよこ（0．1歳児）	光と影の遊び
うさぎ（1歳児）	スタンピング遊び
あひる・ぺんぎん（2歳児）	様々な水遊び
ぱんだ（3歳児）	ダンゴ虫の飼育遊び
きりん（4歳児）	色水遊び
らいおん（5才児）	枝豆の栽培

今年度のクラス	論文内容	継続内容
りす（0歳児）	水遊び	
ひよこ（0．1歳児）	泡遊び	育ちの継続
うさぎ（1歳児）	転がす遊び	遊びの継続
あひる・ぺんぎん（2歳児）	光と影の遊び	遊びの継続
ぱんだ（3歳児）	積木遊び	育ちの継続
きりん（4歳児）	カタツムリの飼育	育ちの継続
らいおん（5才児）	塩の不思議	育ちの継続

３.気づきの分類

昨年度まで本園が継続して子どもを見守る視点として用いている３つの気づきについて整理する。

〇素朴な気づき

様々な対象との出会いのなかで「面白い！」「ふしぎ！」「なんで？」といった素朴な気づきが産まれる。子ども達は心を動かされることで自分たちなりに「めあて・思い」を持ち「試す・見つける」などの行動に移していく

〇関係づけの気づき

素朴な気づきを踏まえて何回も取り組むなかで「またできた！」「今度はちがう！」といった関係づけの気づきが産まれてくる。より深まった「めあて・思い」を持ち偶然ではなく意図的な行動に移していく

〇探索・探究の気づき

関係づけの気づきを体験するなかで「なんでだろう？」「どうしてだろう？」といった探索・探究の気づきが産まれてくる。さらに深まった「めあて・思い」を持ち、自分なりの予想を試したり、予想を確かめるために試していく。

４．今年度のタイトルを考えるにあたって

保育所保育指針の中には「遊びの連続性」という記述が出てくる。その中で今回あえて「継続」という表現をタイトルに使った背景には、継続に「伝承」という意味が含まれていると捉えたためだ。

そこには私たちの保育園がこの地域で、この園の環境の中で今まで積み重ねてきた良い部分をベースにしながら、この先積み重ねていく活動の内容を模索するべきであると考えたからである。

（ 中 略 ）

4歳児　きりん組　　「発見したことを伝えたい！～カタツムリの飼育を通して～

育ちの継続

昨年度はダンゴ虫の飼育を通して「どんな所を歩くかな？」と木の枝や鉄棒の上などを歩かせて遊んだことで、歩ける場所や歩けないところの発見があり、子どもたちなりに「〇〇だからかな？」と考える姿があった。今年度は、カタツムリとの出会いから、昨年度の経験を通して生き物の生態に興味を持った子どもたちと観察をすることにした。

◎素朴な気付き

場面１　「カタツムリが　やってきた！」　（５月中旬）

食べてるで！！

U児が家で見つけたカタツムリを持って登園してきた。子どもたちは「カタツムリやぁ！！」とケースに顔を近づけ夢中になっていた。野菜を入れると、ゆっくりと動き食べ始める姿に「食べてる！食べてる！」「見て！」と興味を持ち、友達や保育士に伝えていた。

◎素朴な気付き

場面２　「こんな所も歩くかな？①」　（６月初旬）

歩けるんかな～？

べちゃってしてる

支柱を上ってる！

園庭で「遊ばせてあげたい」と子どもが発案し、様々な容器を用意する。「こんなところも歩けるんかな？」と凸凹とした卵パックに入れ、じっと観察すると「お腹がべちょって引っ付いてる！」とカタツムリの体がパックの形に合わせて波打ち、ぴったりと張り付く姿に見入っていた。「すごいな！どんなところでも引っ付いてるで」と容器をひっくり返しても落ちないで、吸盤のように引っ付いているカタツムリの動きに驚き、友達と楽しそうに話をしていた。

◎関係づけの気付き

場面３　「仲間が増えたよ」　（６月初旬）

これで赤ちゃんも住めるようになった！

園庭で虫探しをしていると、小さな赤ちゃんカタツムリを発見！！

「かわいいなぁ」「甲羅小さいなぁ」という声が聞かれた。「このカタツムリも一緒に飼いたい」と大きいカタツムリが入ってるケースを持ってきた。入れようとする友だちの姿を見てＲ児が「大きいのに食べられるかもしれへんで・・・そうなったらかわいそうや」「どうしよう？」と心配そうに話していた。「小さい家作ってあげたら？」「ケースの中に小さい箱入れよう！」と自分の考えを言葉で伝えていた。赤ちゃんカタツムリを守るための優しい子どもたちの姿があり、小さいケースを倉庫から持ってきてカタツムリを通し発見が多く見られた。

◎関係づけの気付き

場面４　「うんちの不思議な色と出てくる場所見つけたよ！」　（６月中旬）

茶色いうんち！

首のところから出てるで！

◎探索・探求の気付き

場面５　「ウンチの色が変わったよ」　（６月下旬）

ニンジンをケースに入れた翌日「先生、茶色いウンチしてる」と子どもたちが発見した。以前まで緑色のウンチしか見ていなかった子どもたちは、色が変わったウンチを見て不思議そうに見ていた。カタツムリの一匹がウンチをしているところに遭遇し、以前「ウンチどこからするかな？」と疑問が上がった時に「お尻のところやと思う！」と意見を統一させていたが、全く別の場所から出ている所を見て「首の所から出てきてるで！！」と驚いていた。その驚きは子どもたちから伝わりクラスのみんながケースの中のカタツムリとにらめっこ。のぞくと「ニンジン食べたのになんでオレンジのウンチじゃないのかな？」と食べたもので色が変わるということに不思議を抱き始めていた。

なんやろう？？

紙を
食べてしまった！？

広告紙を飼育ケースに入れておき、２日過ぎたころに、ピンク色の塊がケースの底に落ちていた。真っ先に見つけたＡ児が「なにこれ？」「こんなん入ってる！」と不思議に感じたことを伝え話していた。前に見た茶色いウンチを思いだして、「これウンチちゃう！？」と友達と顔を見合わせていた。「もしかして、前の紙食べてしまったんちゃうん？」「紙の色こんなんやったもん！」と食べたもので色が変わるカタツムリのウンチに驚いていた。

◎探索・探求の気付き

場面６　「食べ方って面白い」　（７月中旬）

変な食べ方してる！

美味しいところしか
食べへんのかな～？

毎朝、登園した時にカタツムリの家をのぞくことを楽しみにしている。ニンジンの表面がくぼんでいたり、キャベツの葉が波々の型になっていることを、見つけるとすぐにみんなに知らせたくなる子どもたちの姿が増えてきた。
翌日キャベツの白い所（筋）だけ残っていた。「緑の所のほうが美味しいんかなぁ」「白いところは固いんちゃう？」など予想をしながら口ぐちに話をしながらカタツムリの様子を見ていた。

◎探索・探求の気付き

場面７　「こんな所も歩くかな？②」（８月中旬）

のぼってる！のぼってる！

「ケースの壁も上れるんやったら木の枝とかはどうやろ？」と声が上がり、“机の上”“凹凸のあるおもちゃ”“木枝”“葉っぱ”など様々なものを探しだし、歩く様子を見た。
細い枝でもカタツムリが上るのを見て「落ちたら痛いから頑張ってつかまってるんかな？」とＡ児が飼育ケースをカタツムリの下に寄せてあげた。「もし落ちてしまったときにケガしないように！」とカタツムリのことを大事にしているのだと感じた。

言葉で伝えようと思う姿

経験したことを伝える

試したい！と思うことを伝える

できたときの工夫を伝える

自分のできたことを伝える

分からないことを伝える

≪考察≫**「目的を持ち試してみようとしながら、発見したことを友だちと話し合う力」**

カタツムリを飼うようになり子どもたちは毎日飼育ケースを覗いていた。「掃除してあげる！」「霧吹きで水あげないと！」とカタツムリの飼育を楽しんでいた。興味が出てくると子どもたちは友達に「エサ食べてたんやで！見てみて！」と話すようになり、クラスのみんなで見る機会をもつようになった。

４月当初では継続してダンゴ虫探しなどを経験し、カタツムリがやってきたことでカタツムリでも試したいと思うようになる。ダンゴ虫では歩けなかった道をカタツムリが歩くことによって足の数や歩き方を観察する力が身についていた。

ウンチの色が食べるものによって変わる！と発見した時も「色違うで！見てみて！」と友達にすぐ報告し、小さな素朴な気づきも友達に話したいという気持ちが３歳児の時と比べて大きくなっているように感じた。３匹のカタツムリに名前をつけて愛着を持つようになり分かりやすいように色違いのシールを甲羅に貼っておくと翌日にシールが消え、その色と同じウンチをしていた。便をしている様子を何度も見ることで食べるものによって色が変わるという不思議さや驚きを経験し、関係づけの気づきやもっと知りたいと探索・探究の気づきがうまれていった。

子どもたちの「どうなるかな？」「〇〇したい！」という意欲的な発言を活動に結び付けることが友達同士で「こんなことしてたよ！」と話す機会が多くなり観察する力や伝える力が育ったように思う。

今回の事例では飼育を通して子どもたちの気付きを追っていたが、飼育以外にも年齢を重ねるにつれて友達や保育士に伝えたい！という気持ちが大きくなっていく。その中でも気付きにくい子どもたちにも伝わるように気付きを共有する場なども持っていけるようにしていく。子どもたちの今までの経験を通して、これからも子どもたちの意欲的な発言を聞き逃さないようにしていく保育環境を用意していこうと思った。

育ちの継続

５歳児　らいおん組　「赤シソから塩との出会い」

昨年度は赤色と青色を混ぜたら紫色になった！次は赤色と黄色を混ぜたらどうなるかな？色々な色を混ぜることでどんな色に変化するのか繰り返しているうちに自分で新しい色を発見しながら混ぜ合わせて楽しんでいた。今年度は赤シソの栽培から地域の方から梅をいただき梅干をつける機会に恵まれた。赤シソを煮たり塩水につけることでシソの色がきれいに出て青梅から赤梅に染まっていく様子を観察することができた。

◎素朴な気づき　場面１　**「シソを植えよう！」**　（３月下旬）

昨年度、年長児と一緒に栽培活動に取り組み、赤シソから作って飲んだシソジュースがおいしかったことが印象に残っていたのでシソを植えることにした。

シソの種って紫色や！

水につけると芽が早く出るねんて！

植えてみよう！

次の日

１粒づつ植えるの難しいな

シソの種を見てみると・・・「シソの種ってちっちゃいね。」「種って紫色だ！」「葉っぱと同じ色だね！」とシソの種を見て色々と感想を話していた。野菜の栽培の本を見て水につけると芽が早く出てくると書いていたので水を張り種を一晩つけておいた。そして次の日いよいよ畑に植えることにしたが小さく、手にくっつき悪戦苦闘して植えていた。そして大きくなることを楽しみにしながら毎日水やりをかかさずおこなった。

◎探索探究の気づき　場面３**「シソジュースを作ろう！」**　（６月下旬）

色変わってきた！

１枚１枚の葉が大きくなってきれいな赤紫になって食べごろになった葉を見てシソジュース作りを開始した。赤シソに砂がついているのをきれいに洗い茎と葉をちぎって熱いお湯の中に入れた。すると、パーッ紫色だった葉が緑色になるのを見て、「シソの色がとけてお湯の色が紫色になってきた。」ザルでシソをあげると紫色の水になったのを見て「お湯でゆがいたから赤い色がぬけて元の緑色になった！」とシソの色の変化に驚きながら事前に作ったレシピを見ながら砂糖やレモン汁を慎重に混ぜ、シソジュース作りを行った。念願のシソジュースは「すっぱいけどおいしい！」と言いながら飲むことができた。

◎素朴な気づき　場面３　**「梅干しをつくろう」**　（６月下旬）

塩と梅を交互に入れるねんて。

おいしくなぁれ。

赤シソを栽培しているのを見た地域の方が梅を持って来て下さった。「これで梅干しを作りたい！」「でもどうやって作るの？」と話していた。そこで梅干しの作り方の本を見て、作ることにした。

梅のへたを一つづつとり、丁寧に水洗いをした。そしてレシピを見て説明する人、塩をカップで測る人に分かれた。「梅と塩を交互に入れるって本に書いてるよ。」と本を見ながら丁寧に入れ、おもしをのせ数日待った。育ててきた赤シソを２日間干して乾かし梅の上に乗せた。

毎日、梅を楽しみにのぞいていた。しかしある日梅干しの異変に気が付いた。「上の方から梅干しが白くなってない？」「何かの病気かな？」「カビかな？」「調べてみよう！」そして本を見て気づいた。「水につかっていないと梅は白くなるんだって！」「じゃぁどうしたらいいの？」「塩をいっぱい入れたらいいんだって！」「よし！入れてみよう！」と塩をカップに３杯追加し、様子を見てみることにした。毎日心配になってのぞいているうちに梅が全部赤い色の水の中に使っていたのでみんなホッとした。でも「なんで塩しか入れてないのに梅が赤い水に浸かったのかな？」と新たな不思議に思っていた。

◎関係づけの気づき　場面４　**「キラキラしてる！」**　（7 月下旬）

そぉっとやで！

２日後

何かついてるで？

キラキラしてる！

白くなっていた梅も赤く色づいてきた。そこで保育者がレシピの本をそっと棚に置いておいた。それに気づいた子ども達が読んでみると、「土用干しって書いてる！７月の最後の方だって！」「土用干しってなんでするの？」と梅干しをいったん取り出して干すことに疑問を感じていた。そこで調理さんが「もう一度干すと梅が柔らかくなるよ。」と教えてくれた。そしてトングでつかんで「つぶれたらあかんからそっと持つんやで！」と声をかけながら１つ１つそっとひろげた。「いつまで干すの？」「2 日間天日干しやって！」と干している様子を毎日見て楽しみに待った。2 日後容器に移すときに、キラキラ光るものが梅についていることに気づいた。「キラキラしてる！」「なんだろ？」「梅つけるときに塩入れたから塩が固まってるのかな？」とキラキラしたものをちょっとつまんで味見をしてみるとやっぱり塩だったことが分かった。そして再び梅を漬け、食べごろになるまで３週間待った。

◎探究探索の気づき　場面５　**「汗に塩？」**　（8 月上旬）

お日様が良く当たる所にしよう！

夕方見てみると・・・

なんかついてる！

塩や！

しょっぱいわ！

Ｙくんが園庭で遊んだ後に汗を拭こうとして手をなめてしまったら塩辛かったことを友だちに話すと、他の子どもも真似をしてなめてみた。帽子も汗びっしょりになってぬれていたのでなめたらやっぱり「塩辛い！」と口々に言いだした。「帽子も干したら塩でてくるかな？」と言う子どもがいたのでみんなで干すことにした。夕方、帽子を見てみると「なんかついてるで！」「白いのついてる！」「(なめてみると)しょっぱいで！やっぱり塩出てきたんや！」と驚く体験をした。

◎探索探究の気づき　場面６　**「やっぱり塩だ！」**（8 月上旬）

キラキラいっぱいになった！

食べてみると・・・

しょっぱいな。

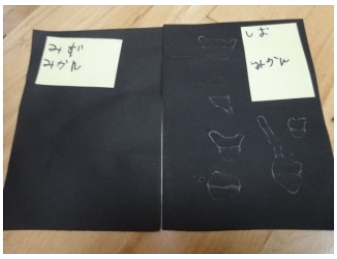
これって塩だね！

「もうそろそろかな？」と毎日のぞいていた梅干しをいよいよ食べる日が決まり給食の時にご飯と一緒に食べることにした。梅干しの容器をあけると・・・「あっ！キラキラがいっぱいになってる！」「この前より固まりが大きい？」梅干しもおいしそう！」と梅がきれいにつかり子ども達は初めての経験に大喜びだった。そして梅干しを食べみると・・・「からっ！」「しょっぱいな！」「このキラキラってやっぱり塩だったね！」食べてみると色々な疑問がとけてきた。

◎探索探究の気づき　場面７　**「塩って溶けるのかな？！」**　（８月中旬）

「梅干しをつける時に入れた塩がとけてまた固まったね。」「帽子についた汗もからかったけど、干したら固まった！塩って水にとけるのかな？」「じゃ試してみようよ！」とコップに水をいれ、そこに塩をいれ混ぜた。すると・・・「あっ！塩無くなったで！」「やっぱり塩ってとけるんだ。」「でも普通の水とちょっと色が違うよね。」と、じっくり塩水と普通の水を比べてみた。「塩水の方ってポカリスエットみたいな色みたい。」「においは同じやで。」と様々な感想を発表した。「塩水を干してみたらどう？」「どうやって干すの？」「このまま外に置いてみようや！」「もうちょっと水が少ない方がいいんじゃない？」「塩水で絵を描いたら塩出てくるかも。」「そうしよう！」そこで保育者の提案で「紙は何色にするの？」「白かな・・・？」「塩って何色やった？」「白！」「じゃぁ白の紙に白の塩が出てきたときって見えにくいのと違う？」「そうか！白より黒の紙にかこう！」と画用紙を用意し黒の画用紙に塩水と普通の水で絵を描いてみた。「干す場所は一番日が当たるとこがいいよね！」と太陽が良く当たる場所に画用紙を並べた。

◎探索探究の気づき　場面８　**「塩出てきたで！」**　（８月中旬）



数時間後干した絵を見てみると・・・白い粉のようなものが出ていた。「見て！やっぱり塩でてきてるやん！」「これって塩なん？粉じゃないの？」「(なめてみると)ほら！しょっぱいでやっぱり塩や！」「水は何にも出てきてないな。」と水に溶けた塩が再び出てくることが分かった。「粉みたいで帽子の時と一緒で梅干しの時のキラキラの塩とは違うな」と言う意見も出た。「なんで塩が出てきたのかな？」と聞くと「水は紙に染み込んで塩だけは染み込まなかったと思う。」と子どもたちなりの答えを出していた。

≪考察≫**「結果を予想し友だちと意見を出し合い工夫して試す力」**

梅干しの塩が固まってキラキラ光っている事に驚き初めは分からなかったけど自分の汗の味もしょっぱいことに気づき帽子を干すとやっぱり塩が出てくることを発見。そこから一度とけて見えなくなった塩は干してみると出てくるのではないかという結果を予想し、干して乾かすとやっぱり塩は出てくるという答えを見つけることができた。

今年の夏は異常な暑さで子ども達は毎日汗だくになって遊んでいた。額から流れ出た汗が目に入り「しみる」→どうして汗がしみるのかな？汗が口に入り塩辛い味がしたこと、梅干しにつかった塩と自分の体内から出る塩どちらも同じ味がするが。体から塩がでてくることに驚き不思議に思ったようだ。そのため汗をかいたら塩が体外へ出て行ってしまうことを保育者は説明し、塩は体にとって大切である事にも気づくことができた。塩は他にはどんな力を持っているのかこれからも深めていきたいと思う。

６．実践の考察

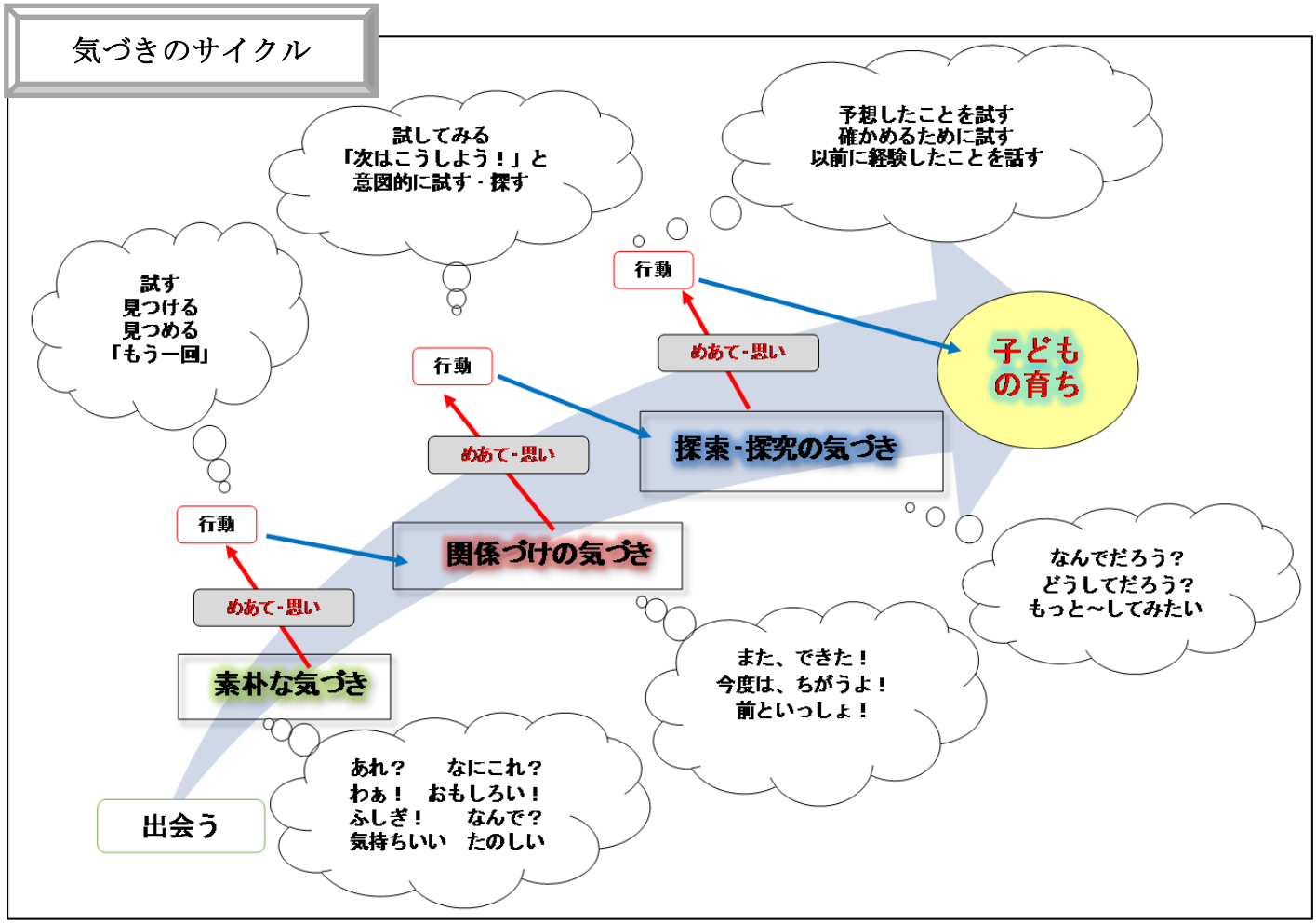
論文をまとめるにあたり、「気づき」という視点から子どもの育ちをとらえた際に、下記図のような「気づきのサイクル」があるのではないかと考えた。気づきにはその子なりの「めあて・思い」があり、行動に移していく中で深化し、新たな気づき・育ちに繋がっていると考える。また年齢が上がるにつれて「めあて・思い」がより具体的になり探索・探究の気づきが中心になってきた。

また今年度の取り組みを通しての子どもの育ちを「環境構成の配慮工夫」「遊びが継続していくための援助」「今年度の育ち」という三つの視点を元に「育ちの木」として整理した。

根の部分である「環境構成の配慮・工夫」では、低年齢では最初の気づきを引き出すための保育者の働きかけが中心だが、年齢が上がるにつれて子ども達から働きかけ、考えることができるように配慮・工夫をした。

さらに育ちを充実した物にするための「遊びが継続していくための援助」では低年齢では、保育者がいっしょに共感するというシーンが多く見られた。しかし年齢が上がるにつれて子ども達から一歩引いた、相談役として太陽のように暖かく見守るという視点が見られるようになる。

そして「今年度の育ち」では偶然の出来事を面白い、不思議だなと感じ、徐々に子ども達から繰り返したり、工夫したり簡単な言葉で伝えようとする場面が見られるようになる。そのような低年齢での育ちを幹や葉の基本的な部分とした。その上に、3・4 歳児では友だちと言葉のやり取りの中での情報共有の大切さを身に付けたり、最終的に 5 歳児では今までの経験を元に友達と結果を予想し、相談しながら試行錯誤して試す力が身に付いてきたように感じる。



育ちの木

遊びが継続していくための援助

0歳児（りす）
・子どもの表情や様子から気持ちを感じとり、共感する。

0・1歳児（ひよこ）
・子どもの気持ちに寄り添い、一緒に楽しむ。

1歳児（うさぎ）
・遊びの中での子どもの姿から環境を用意する。

2歳児（あひる・ぺんぎん）
・子どもの興味や驚きに共感し“もう一回しよう”“これは どうかな？”と遊びを広げていく。

3歳児（ぱんだ）
・失敗しても“もう一回”と思える意欲が持てるような声掛けをする。

4歳児（きりん）
・気づきを友だちと共有できる場を作る。

5歳児（らいおん）
・「この前はこうだったね」と振り返り次は「どうする？」と子どもの考えに寄り添い提案を引き出す。

5歳児
・“こうしたら こうなるのではないか？”と結果を予想し、友だちと意見を出し合い工夫して試す力。

4歳児
・目的を持ち試してみようとしながら、発見したことを　友だちと話し合う力。

3歳児
・一人ひとりが気づいたことを保育者や友だちに伝える力。

今年度の育ち

2歳児（あひる・ぺんぎん）
・友だちがやっている遊びに興味を持ち“いっしょに遊ぶ力。

1歳児（うさぎ）
・以前経験したことを思い出して遊びに取り入れる力。

0・1歳児（ひよこ
・おもしろいと感じたこと（理解したこと）を繰り返し楽しむ力。

0歳児（りす）
・保育者といっしょに楽しんで遊ぶ力。

環境構成の配慮工夫

・年齢に応じて“触ってみたい”“やってみたい”と思える材料を用意する。

・発見したことや感じたことを友だちと共有し、話し合う機会を作る。

・子どもの興味や、遊んだ経験をもとに少しずつ材料や素材を変え、繰り返して遊べるようにする。

・写真や絵などを掲示することで、遊びや気づきの振り返りができるようにする。

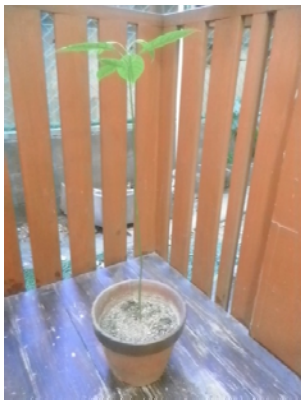
８．今後の方向性・計画

一番大切なのは、この論文を提出したことが決してゴールではないということである。

論文提出以降も子ども達の何気ない表情やつぶやき、友だちとの会話など普段の姿に保育者が寄り添い、保育に継続的な見通しを持ち取り組んでいかなければならない。また、子どもたちが自ら興味を持ち関わり、気づきを深め、広げることができる環境作りも継続する。保育者自身も毎月の園内研修だけではなく自己研鑽に励み、知識だけではなく子どもの姿をしっかりと見る心の余裕を身につけて、子ども達と楽しみながら保育に取り組んでいきたい。

今年度の取り組みの中で長期間に渡り継続し観察できる事例が出てきた。２歳児クラスでアボガドの種の水栽培を行ってきたが始めはなかなか根も芽も出ずに水替えなども、どちらかと言えば保育者主導の活動になっていた。そこから徐々に生長し芽が伸び茎になってきた。そこで鉢に植え替えを行うと目にする機会が増えたからか、子ども達から「葉っぱ出てきた」などの言葉が聞かれるようになり観察を楽しんでいる。

今は小さなこの木を来年度以降も継続して育てて観察し、卒園の際には在園児に託し、観察を続けていきたいと考える。



９．昨年の新人保育士が２年目に継続していく中で見えて来たもの

昨年「気づきとは何か？」という疑問のなか毎月の勉強会に参加し、先輩などから教わりながら子ども達の育ちについて学んできた

しかし、普段の保育の中では子どもの気づき・育ちに保育者自身が気づけない場面が多く難しさを感じていた。

２年目になり保育者自身にも余裕が出てきて子どもが何かに気づき試している姿に気づける事が多くなってきて「次は何をするのだろうか」とある程度見通しをもって保育できるようになってきた。

すると子ども達が繰り返し、夢中で遊んでいる姿の中に大事な気づきがあることが見えて子ども達を見る視点が変わってきた。

これまでの取り組みを「継続」して取り組む事で子どもをよく見ることの大切さを再確認でき、「次はこれを用意してみよう」と保育者自身の意欲にもつながっているように感じる。

研究代表者　溝端　文子　　吉村和秀　森元友香